

デフォルトに対する選択肢数の影響

中村國則^a

要約

本研究の目的は、意思決定におけるデフォルトの影響(Jonson & Goldstein, 2003)を、選択肢数を操作して検討することである。この目的のため、ある選択肢がデフォルトとして設定されている場合とそうでない場合、およびデフォルトが存在しない自由選択の場合における選択率を、全体の選択肢数が2つである場合と5つである場合で比較した。研究の結果、選択肢が2つの場合も5つの場合もデフォルトの影響はみられ、かつデフォルトの影響は選択肢が5つの場合の方が高まる可能性が示唆された。

JEL 分類番号： D01, D91

キーワード：デフォルト効果, 選択肢数, support theory, 選択のパラドクス

^a 成城大学社会イノベーション学部

1. イントロダクション

ある選択肢がデフォルトとして示される場合とそうでない場合とで大きく選択率が変わるというデフォルト効果(Johnson & Goldstein, 2003)は、近年の意思決定研究の中で大きな注目を集めるものである。例えばこのような効果を示した研究の中で最も著名なものの一つである Johnson & Goldstein (2003)は、臓器提供に対する同意率が、デフォルトが臓器提供者となっているオプトアウト方式と、デフォルトが臓器提供者となっていないオプトイン方式とで大きく異なることを、ヨーロッパ諸国の実際の同意率のデータと、アメリカ人実験参加者を用いた実験的研究の双方で明らかにした。このような知見は同じ選択肢であってもそれがデフォルトとして提示される方が選択比率が高くなることを示すものであり、意思決定における準拠点依存(reference dependency; Tversky & Kahneman, 1981),あるいは公共政策における”ナッジ(nudge: Thaler & Sunstein, 2008)”の有効性を示すものとしてしばしば言及されてきた。

さて、このようなデフォルトの影響を調べる際の典型的な実験手続きは、Johnson & Goldstein (2003)にもあるように、デフォルト選択肢と非デフォルト選択肢の2つを示したうえで、デフォルト選択肢のままにするか、それとも非デフォルト選択肢に変更するかを問うものであった。このような実験手続きの背後にあるのは、ある選択肢がデフォルト選択肢とされた場合、非デフォルト選択肢になった場合と比較し、何らかの心理的なメカニズムが働くことによってデフォルト選択肢の重要性が高まり、結果として非デフォルト選択肢の場合よりも選択されるようになるという説明である(Johnson & Goldstein, 2003)。このような説明は損失回避(loss aversion: Kahneman & Tversky, 1979; Tversky & Kahneman, 1981)のような主要な意思決定理論の考え方も整合的であり、デフォルト選択肢を非デフォルト選択肢よりも社会的に奨励された選択肢とみなす傾向がある(McKenzie, Liersch, & Finkelstein, 2006)ことが報告されるなど、支持的な実証的根拠も存在するものである。

ここで本研究が注目するのは、選択肢数のデフォルトに対する影響である。ある選択肢をデフォルトとして設定する状況は、非デフォルト選択肢が1つである状況に限らない。では、選択肢数が増えた場合のデフォルトの影響は、どのように機能するだろうか。先行研究に基づくと、実は2通りの予測を導くことができる。1つは、選択肢数が増えるとデフォルトの影響は弱まるという予測である。Tversky & Koehler (1994)の提案した support theory によれば、焦点のあてられた選択肢に対する支持度は、焦点のあてられない選択肢が多くなる、あるいは分割(unpacking)されるほど弱くなると考えられる。このような立場に基づけば、選択肢数が増えた場合、デフォルト選択肢に依存する傾向は弱くなることが予測できる。

もう1つの予測は、選択肢が多くなるほど逆にデフォルト選択肢への依存が高まり、かえって選択率が高くなるというものである。これはいわゆる“選択のパラドクス”(paradox of choice; Schwartz, 2004; Iyenger & Lepper, 2000)に関する研究から導かれるものである。これらの研究では、選択肢数が多すぎる状況での選択は考える余地が多くなりすぎて逆に“選択の過負荷(choice overload; Iyengar & Lepper 2000)”が生じてしまい、選択に伴う満足度がかえって低下することを報告している。これらの研究を踏まえれば、選択肢数が多くなる状況ではデフォルト以外の選択肢を考慮することがかえって負担となり、デフォルト選択肢を好む傾向が強くなる可能性も予測できるだろう。デフォルトに依存することが思考に伴う労力を減らす可能性は Johnson & Goldstein (2003)でも指摘されており、このような可能性は十分に検討する余地があるといえるだろう。

以上のように先行研究を踏まえると、デフォルト効果に対する選択肢数の影響は、デフォルトへの依存度を高める可能性と低める可能性の2つを考えることができる。そこで本研究はある選択肢がデフォルトとして設定されている場合とそうでない場合、およびデフォルトが存在しない自由選択の場合における選択率を、全体の選択肢数が2つである場合と5つである場合で比較し、選択比率の変動を分析した。

2.方法

2.1 実験参加者

実験参加者は380名(男性147名、女性233名)であった。実験参加者は選択肢数の種類の2条件(2種類/5種類)×選択方法の3条件(デフォ/非デフォ/自由選択)からなる6条件のいずれかに割り当てられた。実験は、Google Formsを用いてオンライン上で行われた。全ての参加者は10分以内に回答を終了した。

2.2 手続き

実験参加者に対しては、回答前にコース料理を食べに来て、メニューを選択できる状況でどんなメニューを選択するかを回答を求める課題であると説明した。回答の Google formを開くと、参加者は「あなたは、今コース料理を食べています。次のページから出される問題について、最も適切だと思う選択肢を選んでください。」という教示文を提示された。その後、複数のメニューから自分が良いと思うものを1つ選択する、という課題を、“おにぎりの具”、“パン”、“サラダ”、“おすしのネタ”、“アイスクリーム”の5種類のメニューについて行った。それぞれの問題については、選択肢が2種類、あるいは5種類用意された中で選択することを求められた。表1に各課題の選択肢を示す。

表1 本研究で用いられた選択肢：デフォルト1・デフォルト2の選択肢は2肢選択・5

肢選択条件双方で提示され、2つのうちのどちらかがデフォルトとして設定された。

	デフォルト1	デフォルト2	5肢選択条件の場合に提示		
おにぎり	おかか	鮭	昆布	辛子明太子	ツナマヨ
パン	あんぱん	カレーパン	クロワッサン	焼きそばパン	メロンパン
サラダ	マカロニサラダ	ポテトサラダ	シーザーサラダ	大根サラダ	海藻サラダ
おすしのネタ	サーモン	マグロ(赤身)	ねぎとろ	いくら	えび
アイスクリーム	チョコレート	バニラ	抹茶	ストロベリー	ラムレーズン

たとえば参加者は、おにぎりの問題については以下のような質問文を提示されたのち、自分が好ましいと思う方を選択することを求められた；

コースにおにぎりがあります。おかかが基本ですが、鮭に変更することもできます。
 どちらのおにぎりを食べますか？以下の選択肢から選んでください。

上の設問は、選択肢が2種類で”おかか”がデフォルトの場合であり、選択肢が5種類の場合は変更する選択肢として”鮭”、”昆布”、”辛子明太子”、”ツナマヨ”の4種類が提示された。非デフォルト条件の場合は”鮭”がデフォルトになり、”おかか”が変更する選択肢の中に含まれた。自由選択条件の場合は、”おかか”を含めた2種類、あるいは5種類の中から自由に好きな選択肢を選択することを求めた。”サラダ”、”おすしのネタ”、”パン”、”アイスクリーム”についても同様の条件設定で選択することを求めた。実験参加者は選択肢数の種類の2条件(2種類/5種類)×選択方法の3条件(デフォ/非デフォ/自由選択)からなる6条件のいずれかに割り当てられた。全ての参加者は10分以内に回答を終了した。

3.結果及び考察

図1に各条件におけるデフォルト1の選択比率を示す。図1をみると、デフォルトと非デフォルト、および自由選択の場合の選択比率が、2選択肢条件と5選択肢条件とで異なっているのがわかる。すなわち、”パン”、”サラダ”、”アイスクリーム”の場合には、非デフォルト条件とデフォルト条件の選択比率の違いが、2選択肢条件と比べて5選択肢条件の方が大きくなっている傾向がみてとれる。ただし、”おすしのネタ”の場合では両条件の差はさほどみられず、”おにぎり”の場合はむしろ2選択肢条件の方がデフォルトと非デフォルトの差は大きくなっている。

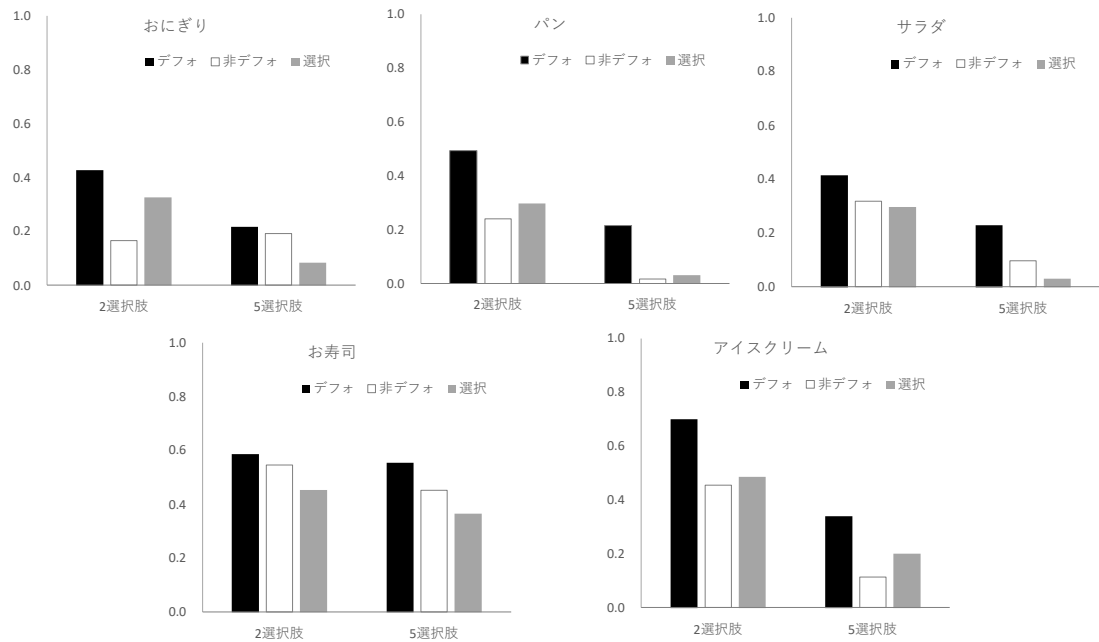


図1 各条件の選択比率

以上のグラフの目視からみえる傾向を統計的に検討するため、デフォルトの設定の仕方(デフォルトになっている・なっていない・選択)の影響が選択肢数(2 選択肢・5 選択肢)によって変わるかを検討するため、選択肢が選ばれている(選ばれている・選ばれていない)×デフォルトの設定(デフォルトになっている・なっていない・選択)×(2 選択肢・5 選択肢)を要因とした対数線形分析を、“おにぎり”・“パン”・“サラダ”・“お寿司”・“アイス”の各メニューについて行った。その結果，“お寿司”の場合を除き($Z=-1.74, p<.08$), “おにぎり” ($Z=-3.38, p<.001$), “パン” ($Z=-4.30, p<.001$), “サラダ” ($Z=-3.11, p<.005$), “アイス” ($Z=-3.63, p<.001$)の4項目ですべて3要因の交互作用が有意になった。このような結果は、デフォルトの設定の影響が、選択肢数によって変動することを示しており、特に“パン”、“サラダ”、“アイスクリーム”の場合は選択肢数が多くなるほどデフォルトに対する依存が強くなることを示すものである。

以上の知見は、デフォルトの選択に対する影響の原因としては、損失回避のようなデフォルトに対する心理的重みづけの影響よりは、むしろ思考の簡略化の影響が大きいことを示唆するものである。しかしながらこのような説明に合致しない結果も特に“おにぎり”の場合にはみられており、今後の検討課題である。

4.引用文献

- Iyenger, S. S., & Lepper, M. R. (2000). When choice is demotivating: can one desire too much of a good thing? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 995-1006.
- Johnson, E., & Goldstein, D. (2003). Do default save lives? *Science*, 302, 1338-1339.
- McKenzie, C. R. M., Liersch, M. J., & Finkelstein, S. R. (2006). Recommendations implicit in policy defaults. *Psychological Science*, 17, 414-420.
- Schwartz, B. (2004). *The Paradox of choice - why more is less*. New York: HarperCollins.
- Thaler, R .H., & Sunstein, C. R. (2008). *Nudge: improving decisions about health, wealth, and happiness*. Yale University Press
- Tversky, A., & Kahneman, D. (1981). The framing of decisions and the psychology of choice. *Science*, 185, 1124-1131.
- Tversky, A., & Koehler , D. (1994). Support theory: a nonextensional representation of subjective probability. *Psychological Review*, 101, 547-567.